

1 生活科における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 目標・内容の明確化・構造化

① 生活科の目標

- 生活科の教科目標を最も端的に言えば「具体的な体験を通して、自立への基礎を養う」ことである。
- 「言語活動の充実」を意識し過ぎる余り、話し合いや文章表現のさせ方ばかりに目を向けがちだが、「豊かな体験」や「表現したいと思う体験」があって初めて表現につながる。今まで以上に「具体的な活動や体験」を重視すること。

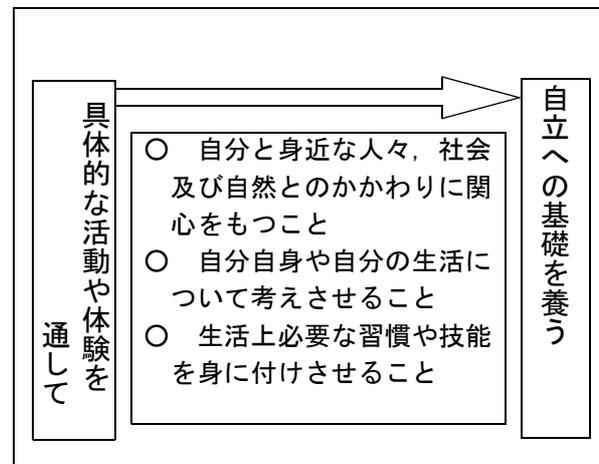


図 1

② 学年の目標

- 2 学年共通に示されており、四つの項目で構成されている。目標（3）は「自分のよさや可能性に気付き、自分の成長についての一人一人の認識を深めること」が更に重視されたことから新設された。

【目標の構成】

- 主に自分と人や社会とのかかわりに関すること
 - 主に自分と自然とのかかわりに関すること
 - 自分自身に関すること
 - 生活科特有の学びに関すること
- 学年目標の（1）（2）（3）それぞれに「～に気付き」という表現がなされている。今回の改訂の特徴であり、「気付きの質を高める」ことを意識したものである。
 - 目標（1）（2）（3）は、目標（4）があることによって充実し発展していく関係である。

③ 内容の構成要素と階層性

- 九つの各内容を三階層に表した。

【第一階層】

児童の生活圏としての環境に関する内容：内容（1）～（3）

【第二階層】

自らの生活を豊かにしていくために低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容
：内容（4）～（8） [※内容（8）は新設]

【第三階層】

自分自身の生活や成長に関する内容：内容（9）

- 各内容の構成要素とその階層性の関係を学習指導要領の解説で明確に記した。互いの関連性を意識して単元構成を行うことに配慮することが必要である。
- 生活科で育みたい児童の姿を、どのような対象と関わりながら、どのような活動を行うことによって育てていくかが重要であり、そのこと自体が内容となって構成されている。

(2) 気付きの質

① 気付きの質とは

- ・ 「気付き」とは、対象に対する一人一人の認識であり、それは児童の主体的活動によって生まれる。
- ・ 低学年の場合は、瞬間的にいろいろなことに気付くが、それが自分の中で明確に意識化されていないことが多い（無自覚の状態）。学習を通して意識化させていくことが、無自覚から自覚へ気付きの質が高まっていくことになる。
- ・ 一つ一つの事象（例えば自然物における形の変化、色の変化、状態の変化など）に対する気付きが、お互いを関連付けた気付きへと変わっていくことで、気付きの質が高まっていく。
- ・ 対象と自分自身との関わりを深め、対象の変化に気付くと同時に、そこに映し出される自分自身の成長への気付きが生じる。この積み重ねが気付きの質を高めていくことにつながる。

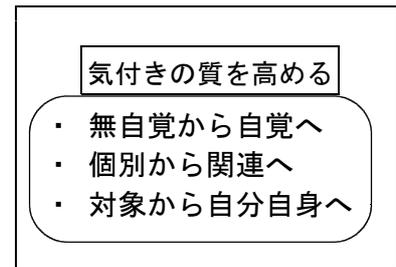


図 2

② 気付きの質を高めるための学習指導

【振り返り表現する機会を設ける】

- ・ 活動や体験したことを振り返ることで、無自覚だった気付きが自分の中で明らかになったり、それぞれの気付きを共有し関連付けたりすることが可能になる。
- ・ 児童は振り返り表現することで、活動や対象を見つめ直したり、過去のことや周りのことと比べたりすることになり、それが気付きの質を高めていく。

【伝え合い交流する場を工夫する】

- ・ 体験したことや調べたことを互いに伝え合い交流する中で、一人一人の気付きが質的に高まることにつながる。さらに、一人一人の気付きを全員で共有し、みんなで高めていくことが重要である。

【児童の多様性を生かす】

- ・ 児童の思いや願いに寄り添うことは、学習活動に多様な広がりを生み出す。児童の学習活動が多様であるということは、それぞれの気付きも多様であるということであり、それぞれの違いや共通点を見付け出す活動を通して、気付きが質的に高まっていく。

(3) 言葉（表現）と体験

- ・ 言語活動の重視と言われるからこそ、それ以上に「体験」を重視すべきである。体験することで言葉も豊かになり、体験することで語い数も増える。アウトプットさせるためには、インプットが重要である。体験活動が充実していることが、言語活動の充実につながる。
- ・ 言語活動が充実することで、さらに体験が質的に高まっていく。
- ・ 言語活動の充実を考える場合、「言語」を「表現」と捉える。言語活動だからといって、文字言語や音声言語にとらわれるのではなく、絵、動作、劇化など子供たちの多様性を考慮するようにすることが大切である。

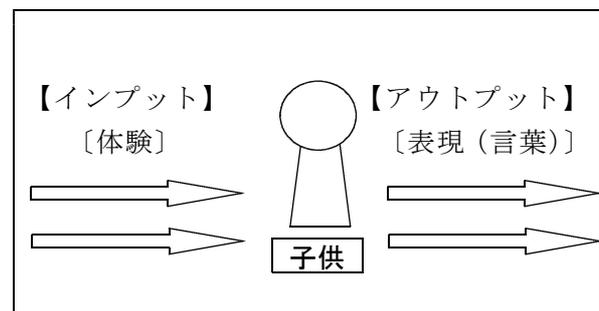


図 3